

愛隣館研修センターニュース

〒612-8141 京都市伏見区向島二ノ丸町151 Tel:075-621-3849 Fax:075-621-1579

E-mail:airinday@sunny.ocn.ne.jp http://www.airinkan.net 振替:01020-5-39321

編集発行所:社会福祉法人イエス団 愛隣館研修センター 発行責任者:平田 義

106号

にっこりフェスティバル 「ありがとう愛隣館」

40年の月日が流れました。

この向島に愛隣館研修センターが開設されたのは1979年です(空の鳥幼稚園・野の百合保育園は1978年にスタートしました)。地域の人が集まる場であってほしい、地域の人と一緒に課題と向き合いたい。愛隣館の始まりは「地域」であり、社会の中で生きづらくさせられている人たちの存在でした。それは今も変わりません。

一方、40年経って様変わりしたこともあります。人口構成の変化により、社会の様々な仕組みの前提が揺らいでいます。相次ぐ自然災害は被害の爪跡だけでなく、普段の顔の見える人間関係こそ最善の備えであることが教訓として刻まれました。多様な価値観の尊重が謳われる中、浮き足立った末の抛り所として、排除や分断にすぎっているとさえ感じられるような出来事も散見されます。生きづらさの形も変容し続けていると言えるでしょう。

これまでの取り組みを継続しつつ、私たちが掲げるインクルーシブな社会をつくりだすために、愛隣館は生まれ変わることを決意しました。2019年の11月に今の愛隣館とお別れし、建てかえ、2020年の9月に再出発する予定です(あくまで現時点での予定です)。

そのため、6/2(日)は、この建物で開催される最後のにっこりフェスティバルとなりました。「さよなら愛隣館、ありがとう愛隣館」というテーマを掲げ、これまでの歴史を振り返る機会をもちました。今回のセンターニュースでは、にっこりフェスティバル当日に、愛隣館にゆかりのある方々にインタビューした内容を載せています。是非ご一読ください。「愛隣館の思い出と、今後の愛隣館に期待すること」というテーマで話していただきました。

▼高木春美さん：向島二の丸民生児童協議会会長

愛隣館が建設工事をしていた頃、1978年ぐらいやったかな、建物ができあがっていくのを向島ニュータウンの住人として見ていました。当時の愛隣館ができてすぐに足を踏み入れた記憶があります。「なんかあの建物で子どものお世話しているらしいなあ。いっぺんどんなところか覗いてみよか」。そんな気持ちでした。

民生委員を務めて約30年。愛隣館とは本当にいろいろありました。「楽しく、この街でよろしくやっていきたい」。願うことはそれだけです。

▼福井義定さん：二の丸北各種団体連絡協議会会長

私は1980年頃から向島ニュータウンで生活しています。愛隣館との出会いは「向島駅前まちづくり協議会」が結成された2005年のことです。当時、向島駅前に葬儀場を建設する話が持ち上がり、その反対運動とまちづくり憲章の策定が主な目的でした。結果的に葬儀場の建設計画は頓挫し、2006年にはローソン

が建設されましたが、愛隣館との関係は途切れていません。2008年には「春の祭典」が開催され、単にイベントを一緒につくり上げるだけではなく、地域の課題にみんなで向き合っていく機運が高まりました。その一環として、認知症がある方の生活をどのように支えるかという実例を発端に2008年12月「向島二の丸・二の丸北あんしんネットワーク」が結成されました。まちづくり全般に関して、愛隣館と共に行動しているという認識です。

この向島は「多文化共生のまち」と言えます。様々な国籍、宗教、文化が混ざり合い、それぞれの信条や背景が大切にされる場所であってほしい。それも踏まえて、誰もが暮らしやすい「健康・福祉のまちづくり」にも取り組んでいきたいと思っています。その一端を愛隣館にも担っていただきたいと思いますし、みんなで盛り上げていきたいですね。

会場にて→



▼黒多みなみさん：向島伝道所 牧師/ にじいろプロジェクトチームマネージャー

私は2001年から向島で暮らしています。愛隣館との出会いは、それよりもっと前で、1979年頃だったかな。当時、観月橋にある世光教会と協力して、土曜日に愛隣館で子どもたちの集まりを行っていました。その頃は子どもがごったがえして…クリスマスのイベントの時はプレゼントが足りなくなって、大慌てで近商に買いに行ったなあ。

平田さんは今でこそ温厚やけど、愛隣館に来た時なんてそれはもう…コメントできないくらい(笑)。まあそういう時代でもありました。運動というか、行動を起こすにはそれくらいの気概みたいなものが必要だったわけですね。

愛隣館の印象は「とにかく忙しい」。確かに色々期待されるだろうし、「自分たちがやらなあかん」という使命感みたいなものは必要やけど、それにしても「大丈夫かいな」と思ってしまいます。正直なところ危惧しています。居場所づくりも大事な役割かもしれないが、本当の居場所は地域全体であってほしい。その中心が愛隣館であってほしい。危惧していると言いながら申し訳ないけど。

▼矢吹文敏さん：日本自立生活センター代表/ 二ノ丸自主防災会会長

向島で生活を始めて、10年も経っていないんじゃないかな。山形県出身で京都に来て32年、各地を転々としたけど、いざ向島に住むことが決まった時の印象は「恐いおじさん・おばさんがいるところ」だった。でも、ここで色々な出会いがあって、「みんな楽しく暮らしているんだなー」とつくづく思う。

最初は愛隣館の場所さえ分からなかったのに、今ではうまく「いじられて」、私自身も楽しく暮らしています。そんな愛隣館に「これ以上期待していいものか」と思いつつ、まだまだがんばってもらわないと。福井さんもおっしゃったように、「みんなで共に生きる」ということを意識しないといけない。具体的に。言葉だけの掛け声ではなく。しかも、それは人間だけじゃないよね。昨日、向島中央公園でホタルを見た。メダカもいる。企画してくれる人、掃除してく

れる人、色々な役割をもった人の努力によって成り立っていることを忘れちゃいけない。

ひとつ感動したことがある。去年の台風で向島中央公園の桜が折れた。でも、今年の春には満開の桜を咲かせてくれた。ちょっとウルウルした。「自分ももう一花咲かせなきゃ」と。その桜を見上げる子どもたちもいる。その子どもたちがこの街でどのように成長していくか。全体を見守るのが愛隣館。「愛」が込められているんだから、「愛」で受け止め合いましょう。

いかがでしたか？

きっと愛隣館に関わってくくださった方の数だけ、思い入れがあることでしょう。もちろん、私たちにとって耳の痛い、目を背けたくくなるようなご意見もあるかと思えます。目の前に立ちはだかる問題の根深さに直面すればするほど、どこにもぶつけられない怒りや、手立てを見出せない無力さに打ちひしがれます。だからこそ、今の自分たちは何ができるのか。40年の歴史の原点を忘れず、思考と歩みを止めないためにも、厳しいご意見は叱咤激励として受け止める所存です。

建てかえ工事は2020年1月に着工する予定です。近隣の皆さまや愛隣館を利用してくださっている方々に多大なご迷惑ご不便をおかけします。工事中は旧向島中学校に拠点を移して通常業務にあたる予定ですが、慣れない環境の下、さらなるご迷惑をおかけすることも予想されます。新愛隣館ではこれまで以上の実践に邁進する覚悟でありますので、何卒ご理解ご協力のほど、よろしく願い申し上げます。(出口剛史)

「平和」をつくる集会
8月6日(月)8:00~8:30
場所:中央公園被爆アオギ12世前
原爆犠牲者への追悼を祈り、平和への思いをつないでいく集会です。どうぞお越しください。

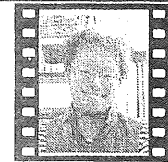
2019年4.5.6月の活動

4/2-8 お花見at伏見港公園
4/19 ウェルカムパーティー参加
6/01 ホタルの夕べ 今年も自生ホタルが!
6/02 向島にっこりフェスティバル

6/09 向島元気バザール参加
6/10 医療的ケア学習会(カニューレ編)
6/22-26 イエス団沖縄平和研修
6/30 喀痰吸引第3号 基礎研修



あんぼんとすぎちゃんの「この映画Do?」



あんぼん：「愛隣館も出来てから40年経つんやなあ」
 すぎちゃん：「地域との繋がりが大切やなあ」
 あ：「そういえば今度やる「なつやすみ平和映画上映会」って知ってる？」
 す：「地域の人たちと一緒に平和について考えられる機会に、って毎年8月にやってるやつやろ？今度は何やるん？」
 あ：「『沖縄スパイ戦史』って去年公開された映画や」
 す：「スパイってハードボイルドもの？格好ええやつ？」
 あ：「74年前に起こった沖縄戦は知ってるやろ？」
 す：「うん。艦砲射撃や爆撃による『鉄の暴風』、日本軍による『強制集団死』、住民をまきこんだ激しい地上戦で県民の4人に1人が犠牲になった。6月23日に日本軍司令官指揮による組織的抵抗が終了したんやね。」
 あ：「沖縄戦といえば地上戦が語られることが多いけれど、それだけでなく、沖縄北部の山原（やんばる）では10代の子どもたちからなる少年兵によるゲリラ戦やスパイ戦が続いたり、米軍の上陸がなかった離島でも住民の大きな犠牲があったんや。
 この映画は、これまであまり語られることが少

なかった、いわば『裏の沖縄戦』を様々な取材を元に描かれてゆくだけでなく、今の状況の危うさまで明らかにしてゆくドキュメンタリー作品なんやで。」
 す：「戦後70年以上経って、当時を体験してきた人たちが段々と少なくなってくる中、お話を聞いて過去と向き合うことは大切やね。同じ過ちを繰り返さないためにも！」
 あ：「当日は、沖縄の恩納村で戦争の歴史の編さんに携わっている瀬戸隆博さんによる講演会もある。映画の中でも証言されてる、恩納村で展開された護郷隊という少年兵部隊について聞き取りをされている方なので、学びを深める良い機会になると思うで。」 (安野友喜)

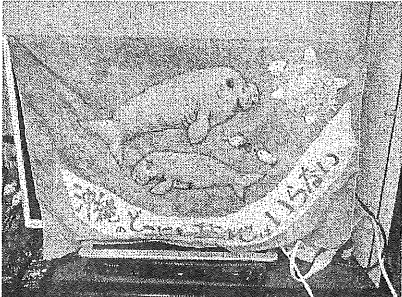
なつやすみ平和映画上映会
「沖縄スパイ戦史」
 8月12日(月)①10時②14時③18時
 16時 瀬戸隆博さん講演
 会場：愛隣館野の百合保育園ホール
 上映協力券800円(当日1000円)

***** 第15回 沖縄平和研修報告

6月22日(土)から26日(水)まで、梅雨ただ中の沖縄平和研修に参加させていただきました。初日、集合が朝6時45分神戸空港という少々ハードなスケジュールでスタートしました。那覇空港から先ず向かったのは、アメリカ潜水艦ボーフィン号の魚雷攻撃により沈められ1400名以上の疎開者（その多くは学童でした）の犠牲を出した対馬丸記念館でした。その後、第二次世界大戦の激戦地であった嘉数高台公園へ行き、公園よりオスプレイが駐機する普天間基地を望みました。次に在日米軍のヘリコプター墜落跡の沖縄国際大学へ行き、最後に佐喜真美術館へ向かいました。

「沖縄戦の図」の前で詳しい説明をしていただいたのですが、私は絵そのものから訴えかけられる種々の感情に動くことができず、目を見張るばかりでした。2日目は30年ぶりの雨の中の平和行進、午後は南部の戦跡めぐりと心身ともにハードな1日となりました。3日目の24日は伊江島（沖縄本島の本部半島、北西約9キロの海上に位置する、周囲約24キロの離島）へ渡り、謝花悦子さんのお話を聞かせていただき、又チドゥタカラの家資料館を見学後、アハシャガマや伊江島タッチュー等の島めぐりをしました。4日目は沖縄本島へもどり、辺野古へ向かい、「不屈」と「平和丸」の船に分かれ、大浦湾をみてきました。

基地建設のため海の上に浮かぶフロートが延々と続く辺野古の海を目の前にした時、昨日の謝花さんの話された「私は戦争が終わったと思ったことは一度もない」とのことばが、現実であると感じました。今もここ辺野古では戦いが続いている…それが沖縄であると。そして無理だとか、しかたがないでは終わることのできない「決してあきらめない！」不屈の思いが必要なのだと強く感じました。午後はチビチリガマ、シムクガマへ行き、それぞれのガマのあり様を「不屈」船長である金井創牧師より聞かせていただきました。最終日は朝から台風のような雨風の中、帰りの飛行機の心配をしながら、瀬長亀次郎さんの軌跡をたどる不屈館へ行きました。5日間、多くのものを見て、聴いて、感じ、考えた沖縄の平和研修。私の中で、まだまだ消化できず、行程をたどるだけの報告となってしまいましたが、ここから自分の体験してきた物事をしっかりと受け取り、行動できるよう努力していきたいと思っています。(下野可奈恵)



あいりんコラム 「福祉だけで関わる暮らしからの脱却」

近年、大地震や水災害による被害が相次いでいる。災害は見境なく命を脅かすが、とりわけ危機にさらされやすいのは障がいのある方など、いわゆる避難行動要支援者である。

昨年7月の西日本豪雨により、小田川など複数箇所が決壊し、町の4分の1が冠水した岡山県真備町。知的障がいのある母親と5歳の少女は避難できないまま、自宅があったアパートの1階で溺死した。この親子は、2階に避難して助かった住民と普段から交流がなかった。顔見知りか一人でもいれば…「早く2階に逃げろ!」と促されていたかもしれない。

2019年6月20(木)、京都市南部自立支援協議会の「災害」部会にて、同志社大学の立木茂雄教授をお招きし、「誰ひとりとり残されない防災をめざして」と題して講演会を開催した。立木教授は、大分県別府市で障がい当事者・地域・福祉・行政等の協働による個別避難計画づくりに先駆的に取り組んでおられる。ただ、全国的に個別避難計画の作成は進んでおらず、原因として「平時の福祉」と「緊急時の防災・危機管理」の取り組みが分断されていることを指摘された。

亡くなった真備町の親子は、相談支援専門員が定期的に面談し、自宅で家事をサポ

佐藤雅裕

ートするヘルパーが毎週訪問していた。ただ、近隣に頼れる人はおらず、避難所の場所すら知らなかった。命を守るか失うかの瀬戸際は福祉サービスだけでは太刀打ちできず、ありふれた日常のご近所づきあいに委ねられることを物語っている。

では、いかにして地域・防災とつながりをもつのか?立木教授は、平時と災害時を切れ目なくつなぐためにも「福祉防災」の観点で福祉関係者が防災の知識や技術を身につけること、当事者と災害についての情報を適切に処理する「防災リテラシー」を高めることが重要だと話された。つまり、地域・防災と福祉をつなぐ役割が福祉関係者に求められている。

今年度、京都市は障がい支援区分6でひとり暮らしの方を対象とする「重度障がい者個別避難計画作成等推進事業」を京都市南部圏域の3支援センターに委託した。大切なのは障がいのある方と自主防災会等の地域が出会い、一緒に避難行動等を考えていくことではないだろうか。先の豪雨により真備町では52人が亡くなった。その9割が高齢者や障がい者だったという事実は「福祉だけで関わる暮らしからの脱却」という新たな課題を私たちに突き付けている。

(参照資料:岡山県危機管理課2018/9/6現在)

2019年 夏期献金のお願い

皆様方のご理解とご支援によって支えられ、活動を続けられますこと、心より感謝します。今年度も夏期献金にご協力頂きますよう、お願いを申し上げます。

《夏期献金・要項》

目的:障がい児・者とその家族とが地域で安心して暮らすことができる為に
愛隣館研修センターの今後の活動を支援する

目標金額:3,000,000円

郵便振替:01020-5-39321

口座名:社会福祉法人イエス団愛隣館研修センター

★お知らせ★
▽愛隣館研修センターは、8/15を休館日とさせていただきます。

★編集後記★
▽106号の「意見」感想をお聴かせ下さい。(カ)

▽愛隣館が建設されて40年が経過した▽これまで歩みは、多くの方々のお支えとお祈り、神さまのお導き無しには語れない▽感謝である▽新愛隣館の建設計画が進んでいる▽新しい器が与えられる▽ことなる▽これまで大事にしてきた生きづらさを抱えている人を隣り人として愛して(大切に)して)いくことを継続しつつ▽インクルーシブな社会をつくりだすために新たなミッションに挑戦していく▽多様な性を認め合い、すべての方がその人らしく生きていける地域社会を目指して歩み続けたい▽引き続くお願いしたい(ひ)